



第31回 2024年 沖縄シンポジウム沖縄とともに―慰霊の日を迎えて―

人権擁護委員会沖縄問題対策部会 寺崎 昭義 (24 期)

1 はじめに

「慰霊の日」を翌日にひかえた2024(令和6)年6月22日、標記のシンポジウムが開催された。6月23日は、太平洋戦争下の沖縄戦において、組織的な戦闘が終結したとされている。この日を、沖縄県は、「慰霊の日」と定め、糸満市摩文仁の平和祈念公園で、沖縄全戦没者追悼式を行っている。

沖縄県民を巻きこんだ数か月にわたる地上戦、「鉄の暴風」と称されるアメリカ軍の砲爆撃などで、沖縄県民の2割を超える民間人が犠牲となっている。戦争の記憶を風化させないこと、住民が戦闘に巻き込まれ多くの犠牲者を出した沖縄の歴史を忘れないことをテーマとしてシンポジウムが開催された。

2 第1部 戦後の沖縄に米軍、自衛隊が駐留することによって生じる被害の実態

第1部は、1959(昭和34)年6月30日の宮森小学校米軍機墜落事故の体験者で、自衛隊訓練場設置計画の断念を求める会事務局長の伊波洋正氏が講演を行った。

1959(昭和34)年6月30日、石川市(現うるま市石川)の宮森小学校とその付近の民家に米軍ジェット機が墜落炎上し、死者17名(うち児童11名)、負傷者210名(うち児童150名)、民家17棟、公民館1棟、小学校の3教室が全焼、2教室が半焼する大惨事が発生した。伊波氏は、事故当時、宮森小学校1年生であった。伊波氏は、この宮森小学校米軍機墜落事故の惨状について目に涙を浮かべながら話された。また、伊波氏は、沖縄における本土復帰後も現在に至るまで続く米軍による人権無視、米軍による事件の被害の実情について話された。

そして、伊波氏が取り組んだ自衛隊のうるま市石川の住宅地に隣接する土地でのミサイル訓練場設置計画を「保革」を超えた運動により断念^{はじめ}させたことを話された。

伊波氏の講演後、藤川元部会長が、宮森小学校米軍機墜落事故や、米軍の謝罪・再発防止策・被害者への損害賠償や、うるま市石川の自衛隊訓練場計画を断念に追い込んだ原動力などについて伊波氏と対談を行った。

3 第2部 近代沖縄と日本の国防

次いで、近代沖縄と日本の国防について、宮平真弥流通経済大学法学部教授が講演された。宮平氏は、日本の国防における沖縄の位置づけについて、福澤諭吉の1886(明治19)年9月21日の「時事新報」で発表された意見を紹介し、福澤が「欧米列強への防備を固めよ」との主張の中で八重山への軍艦配備、兵の駐屯を訴えていたことを述べ、明治期からの日本の近代化の誤りについて話された。そして明治期からの沖縄に対する差別について話され、沖縄戦において、日本兵による沖縄住民に対する残虐行為の法的根拠は軍機保護法にあることを指摘された。沖縄の方言を話すものをスパイ視する、第32軍の「軍人軍属間ワズ標準語以外の使用ヲ禁ズ」、「沖縄語デ談話シアルモノハ間諜ト看做シ処分ス」(32軍参謀 長勇)との「スパイ視」について話された。

宮平氏の講演後に、滝沢香部会員が、近代以降終戦までの日本政府の沖縄に対する対応と現在進んでいる自衛隊配備増強の動きとの共通性、「沖縄住民に対する蔑視」などについて宮平氏と対談をした。

4 シンポジウムを終えて

シンポジウムと併せて、6月18日から22日まで、弁護士会館1階において、宮森小学校米軍機墜落事故の写真を中心に、沖縄戦時及び現在の辺野古基地建設についての写真展が開催された。

参加者からのアンケートでは、伊波氏の講演について「宮森小学校事故の経験に基づいた話、沖縄の米軍の暴行、被害の具体例、体験談や事実をもとに話され説得力ある内容だった」「『市民運動が変える事』を理解しました」などの感想がよせられた。

宮平氏の講演については、「明治期からの日本の近代化の誤りもストレートに講義していただき、視野が広がった」、「明治時代から差別の土壌が作られていたので、変えていかなければならないと思いました」「視野を広げて危機感をもって自分事として考えます」などの感想がよせられた。